

The Danube Quarterly

ドナウ通信



2008（平成20）年・春季号



ハンガリー日本人会会報 / The Japanese Community Bulletin



April							May							June						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3	4	5				1	2	3	1	2	3	4	5	6	7
6	7	8	9	10	11	12	4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14
13	14	15	16	17	18	19	11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21
20	21	22	23	24	25	26	18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28
27	28	29	30				25	26	27	28	29	30	31	29	30					

目次

運動部情報

テニス部

日曜テニスクラブの現状と課題

小松 裕文

1

テニスに懲りだしたきっかけ

横地 伸介

3

釣り部

中・東欧思い出の釣り場

関本 正

5

ゴルフ部

パンノニアゴルフコース

山田 進

8

ランニング部

出場申込み受付中

盛田 常夫

9

日本人学校

中学部第二期卒業生

答 辞

小松 幹

10

答 辞

佐藤 陽香

11

小学部卒業の言葉

大島優・恩田依以子・小松愛・島戸優輝・守谷祐貴子

13

船山聖奈・松下隼人・山下芽惟・古賀絢子・船山憧香

みどりの丘日本語補習校

お父さん・お母さんも頑張っています 山内 寿恵 15

小さな関係 大山 彩 17

子供たちとともに、日々成長 渡辺 薫 19

一年をふりかえって 原田 知加 21

ありがとう、複式クラス フルディ満名実 22

映画評論

「牡牛座 レーニンの肖像」 盛田 常夫 25

第3回バルトーク国際ピアノコンクール

金子三勇士君 見事、優勝！ 29

運動部情報

テニス部

日曜テニスクラブの現状と課題

小松 裕文

日曜日午前テニスクラブは発足当時から初心者が気楽にプレーできることが売り物になってきた。

土曜テニスクラブ、日曜日午後テニスクラブの高いレベルがハードルになって入会できない人も多く、そんな人のために発足したといっても過言ではないだろう。かくゆう筆者もその一人。土曜日テニスのスピードについてゆけず、レベルダウンした次第だ。

十二月二十日現在、部員は二十人。年齢構成は二十歳代一人、六十歳代一人のほかは三十歳代、四十歳代。夫妻での参加者も含めて女性メンバーは四人。

すべてのメンバーがレベルの低いプレーヤーばかりではない。高等学校近畿大会の和歌山県代表だった場所さんは当クラブの技術的リーダー。彼のサービスとストロークは嘗て選手だったことを髣髴させる。軟式庭球の経験のある的場夫人のファーストサービスとフォアハンドは男性顔負け。大学時代サークルでテニスを経験した野村さんのプレーはミスが少なく正確だ。日曜テニスで四年間プレーしてきた横地、上田さんは地道に実力をつけてきており、正に継続は力なり”を感じさせる。

今年の新入会員は七人、始めてラケットを握る超ビギナーもいて、技術のレベルは経験者に比べて大差ありが現状だ。まだラリーの感覚がつかめないメンバーもいて、そのレベルアップが目下の課題だ。

このため従来のパターンⅡウォーミングアップの後ダブルスのゲーム

Ⅱに基礎練習を取り入れ始めた。二面使っているコートの一面は従来のようにゲームを楽しむコートに、もう一面をストローク、サービスなどの基礎練習に充てるもの。

指導・コーチは的場さんが引き受けて頂けることになったので、間違はなくメンバーのレベルは上がるはずだ。練習メニューも目下作成中。ほかにコーチ役を引き受けて下さる経験者の来会也大歓迎。

ハンガリーテニスクラブとウィーンスクラの対抗戦が六月九日、ウィーン郊外・ドナウシテイスポーツセンターで行われた。当クラブからは的場、的場夫人、横地さんに加えて筆者も老骨に鞭打って参加した。男子ダブルス六試合、ミックスダブルス二試合の結果は六対二でウィーンチームに敗北。相手の実力は、将棋で言えば大ゴマ一枚の差。的場さんを除けばサーブが極端に弱い。サ

ープを強くすることがハンガリーチームの課題と感じられた。

試合後の懇親会にはビッグプレゼントがあった。なんとウイーン滞在中のマエストロ・世界の小澤征爾が顔を見せてくれたのだ。会は一瞬にしてサイン会、撮影会場に早替わりしたのは当然のこと。小澤さんはすでに七十歳を超えているが、時々ウイーンのクラブでテニスを楽しんでおられるとのこと。頑張らなくちゃー、と感じた次第だ。

「ラケットを上にも構えて、目の前に来るボールにラケットを当てろ」「レシーブはゆるくていいから前衛を超えるボールを上げろ」・・・テニス暦のあるクラスメートから受けたアドバイスだった。昭和三十一年（千九百五十六年）、長野県的高等学校時代の球技大会で軟式テニスのクラス代表に選ばれて、始めてラケットを握った筆者へのアドバイスだった。試

合では何本かのボレーを決め、無難にレシーブしたように記憶している。これがテニス初体験だ。

時は移り昭和三十八年の名古屋。町の中心、テレビ塔の近くにクレイコートの栄テニスコートがあった。ここで東西学生テニス対抗戦が行われた。なぜか慶応大学の半那、長崎組のプレーが印象に残っている。白い襟付きのポロシャツ、白のトレパン姿がすごく格好良かった。サービスアンドボレー、ボレー合戦あり、ポーチでポイントを稼ぎ、ロビングで守りきったり、いくつものダブルス戦の見せ場があった。

硬式テニスとの出会いであった。実際に硬式テニスのラケットを握ったのは五十歳前後のこと。

当時住んでいた千葉県流山市で「シバルバーテニスクラブ」のメンバーになれてからのこと。しかし最初の試合は惨めなもの。イメージとはかけ離れ全然試合にならなかった。サー

ビスはダブルフォルトの連続、満足なストロークもできず、サービスレシーブはできても前衛の餌食。それから一念発起して近くのテニスクールに通いだしてようやくテニスの仲間入りができた。

日曜日午前テニスクラブの練習は午前九時～十一時の二時間、ヴァーロシユマヨルのハードコート。会費は参加人数によって左右される、がおおよそ夏季一万フォリント、冬季一万五千フォリント。ヴィジターは一回一千フォリント。参加資格などは特別作っていないが、できるだけ練習時間に遅れないこと、欠席の際はできるだけ幹事に連絡することが申し合わされている。ヴィジターも大歓迎だが、できれば事前に連絡をしてもらえればベター。幹事は横地（shinsuke.yokochi@nissso.hu）上田（Ueda.tomoko@nissso.hu）の両氏まで。

テニスに懲りだしたきっかけ

横地 伸介

日曜午前テニス部で現在幹事をしています横地です。最近ではテニスに懲りだして益々テニス好きになっ

ていった私ですが、その前はあまり真面目なプレーヤーでなく“なんとなく”なテニスプレーヤーでした。そんな私がテニスのことを書く

となったので、それでは私が“なん

となく”から“懲りだした”きっかけ、またはその経歴を書いてみよう

かと思っています。

私がハンガリーでテニスを始めたきっ

では。皆さんテニスが上手で常にダブルスの試合をしていました。そのころの私は動物的な感覚を駆使してパワー・テニスのプレーをしていました（いわゆる自己流テニス）。でも調子の良いときと悪いときの差が激しく仲間内でプレーするのは良

いけど、他の人たちとの交流試合などはまだまだのレベルでした。その頃は皆さん大人のプレーをする人が多く、パワーだけでなくコントロールのいいボールを返す人や、相手の

パワーを生かしてうまく打つ人など

もいていろいろ勉強になりました。

二年位前にこのテニス同好会が日本人会のテニス部になり部員もだ

んだん増えていききました。今では二十名になり昔のメンバーも帰任し

私でしたが、やはり正式にテニスをされていた場さんのパワーとテクニクを実際に見て、これはすごい、自分も負けてはいられない！”と向上意欲が湧き出てきたのがテニスに懲りだした始めてのきっかけでした。

この時から場さんにいろいろアドバイスをしてもらったり、自分でテニスのサイトを探しながら独学したりし始めました。けっこういろいろ

なサイトもありどれが良いんだ

か分からずとにかく手当たりしだいにいろいろトライしてみました。

昨年二〇〇六年の夏に初めて他の日本人テニス部との交流試合に初参

加しました。けっこう緊張していましたが、ましていつものメンバーとは違った人たちとプレーをするので自分

んで本番ではだめなんだ！”と自分にいらいらし始めると益々不調になり、なんか自分がつくりしました。でも他のプレーヤーの人達も暖かく迎えてくれたので“次回こそは！”と益々テニス向上意欲がわいてきました。

その後は何回か交流テニス会に参加してだんだん試合慣れしてきましたが、まだまだ自分の思ったとおりにテニスが出来ない状態でした。でもいろいろな人と試合するのは楽しく何時も交流試合は楽しみにしていました。

第二の大きな凝りだしのきっかけは二〇〇七年の七月にウイーンの日本人テニス愛好家とブダペストの交流試合でした。始めの対抗試合は相変わらず思い通りのプレーが出来ませんでしたが、対抗試合後に空いている人たちとの気楽な気分での練習試合がその転機でした。ウイーンチームのトップクラスの人と中級クラ

スの人の組と私とウイーンチームの一人（この人も中級クラス）と対戦した時のことです。スピードも速く、リズムカルに打ってくるので、もう無我夢中でボールに集中してボールを返すことだけに専念してました。

そこで不思議なことが起こりました。今までずっと不調だった私のテニスが絶好調に早代わり。打つボールのスピードもコントロールも自分の思いのままに打って、心理的にもすごく自由になった気分でした。気がつくとも自由奔放にボールを楽しく打ち返していました。何か自分の殻が崩れて自然に体が動いてボールを打っている感じがしました。

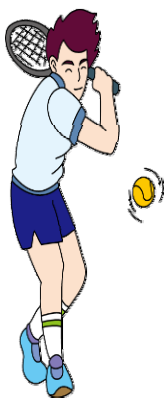
本当にこの体験は自分でも不思議でした。前に対戦したウイーンの人からも“どうしたの？さっきと全然違うプレーしてるけど”と言われました。

あとで考えてみるとあれがよく言われる“ハイになる”ということだ

ったんですね。

それまではプレー中でもこうでもない、ああでもないと考えてばかりでその為に不要な緊張自分にかけてたのでしよう。今までの不調は技術的な部分もさることながら、心理的プレッシャーを自分にかけてすぎて体がカチカチに硬くなつて自由にテニスをしていなかったのだと思いました。この体験はテニスは心理的なものがすごく影響するスポーツなんだなと実感させてくれました。

このような幸運なきっかけの為に今はテニスに凝っています。技術面でもまだまだですがこれからは心理面でもいかに“ハイになれるか”を心がけて楽しくテニスを続けて行きたいと思います。



釣り部

中東欧思い出の釣り場

ー スロバキア・オラバ川

関本 正

昨年の日本人会総会後の懇親食事で福引の司会をさせて頂きました。総合司会の酒井さんより、「釣り部だけあって商品を釣り上げるのが上手」と紹介されましたが、まさかあれ程大当たりするとは思っておりませんでした。連番10枚、バラ10枚買った内、特賞日本往復航空券が2枚とも、私の購入した連番とバラに当たったその時に多分運を使い果たしてしまったようで、今年になつてからちつともいい事ありません。ただ、航空券を一枚辞退させて頂いたのでその分の運が残っている事を願っております。

さて、4月から2008年の釣りシーズンが開幕します。4月は水量も多く難しい釣り場が中心となりますので釣り部全員の行事としては5月の新緑まぶしいオーストリア、そう、誰でも釣れる「爆釣(バクチョウ)の湖」とイワナの塩焼き／骨酒ツアーあたりから始めようと思います。キャステキングなんか出来なくてもノープロブレム。ボートからのトロリーリングでイワナがバカスカ釣れます。一方、上級者は遠めにキャステイングしてのスローリトリープで大物を狙えます。残念ながら部員のIさん、Mさんが3月末で帰国されることになり寂しくなります。新入部員の入部を釣り部一同鶴首しております。

私がハンガリーに赴任したのは2000年6月。赴任後最初に釣りをしたのは2001年3月、スキーで訪れたオーストリア山中でたまたま

出会った小川でのニジマス釣りでした。

その後色々な場所で釣りをしましたが、スロバキアのオラバ川はその中でも思い出の場所です。スロバキアでの釣りとの出会いは、用事で泊まったバンスカ・ビストリツアのホテルに紹介してもらったご当地釣りクラブからもらったパンフレットでした。2001年5月の事です。その時はスロバキアに入国するのにビザが必要で、日本人にはあまり馴染みのない国でした。コイ、パイク、鱒とスロバキアの色々な釣りと釣り場が紹介されていて、その中にポーランドの国境近くでグレーリングとフーヘン(別名ドナウ・サーモンと言われるイトウの仲間)が釣れるオラバ川がありました。ガイドが1・5メートルもあるフーヘンを持った写真が印象的でした。

その年は9月にニューヨークのテ

ロがあつたり10月にアフガン戦争が始まつたりと物騒な年でしたが、そのお陰で秋は出張者が激減し時間に余裕が出来たので、秋も深い10月にオラバ川の探検に行く事にしました。特別なコネでスロバキアの6ヶ月マルチ・ビザも入手しイザ出陣です。

ブダペストから車で3時間半走るとオラフスキー・ポドザーモク、和文に訳すとオラバの城下町、という小さな町があります。オラバ川に面した絶壁の丘の天辺に中世のお城がそびえる趣のある場所です。オラバ川の釣りはそのお城から程近い場所でした。

村人を捕まえて、スロバキアの釣りパンフレットに書いてあるオラバ川の釣り場管理人の家を探します。ヤンデックという人でパンフレットに載っていたガイドのおじいさんでした。息子さんが多少ドイツ語が出来るので、息子さんに釣りをしたい

旨伝え釣り券を頼みます。ところが釣り券は別の街に住んでいるシュテファネックという人が扱っている由。連れて行つてやるからまあ一杯飲みなさいというのに甘え、ガイド親子の客になります。その後取りあえず近場の宿屋にその晩の宿を求め、息子さんの方のヤンデックさんが迎えに来た車で夕食後のシュテファネックさんのお宅に伺いました。

シュテファネックさんは英語もドイツ語も出来ないもので、片言のロシア語、スロバキア語もどき、ヤンデックさんのドイツ語通訳、身振り手振りでの話でしたが、何でもシュテファネックさんはチェコスロバキアのフライ・キャスティングの往年のチャンピオンとして70年代に知られた人のように、毛鉤をいろいろ見せてもらつたり、社会主義時代のフライ竿を見せてもらつたりと大変興味深いひと時を過ごさせてもらいました。明日は自分は用事があるか

ら釣りには行けないけどせいぜい楽しみなさいと声をかけて頂き、有難く釣り券を購入しその晩は宿屋に帰りました。

翌朝ゆっくり朝食を済まし川にでます。天気は生憎の曇り・時々雨ですが、初めての川なので胸が高鳴ります。10月のオラバ川はグレーリングの釣り場で、川を見つめていると川の流れの中でグレーリングが身を翻しギラリと光るのが見えます。1930年製の10フィート4インチの長さの竹竿にシルク・ラインそれにウェット・フライ(沈み毛鉤)いう古風な道具立てで釣りをしてみました。まあ、日本でも世界中どこでもこんな道具で釣りをすればかなり目立ちます。川はかなり広く50メートルくらいの幅があり、また流れもかなりあります。グレイリングは足元近くには居なく、竹竿の長さを生かし斜め上

流に出来るだけ遠投し毛鉤を出来るだけ長く自然に流すよう努めます。ところが、何度も何度もやってもグレーリングは騙されてくれないのです。多分シュテファネックさんのような腕利きにずいぶん痛めつけられているので魚もかなりかしこいのでしょう。寒いし、雨は降るし、川の中の一本の杭になつて時間を忘れ集中します。

もう、釣りを始めて3、4時間も立ったでしょうか。流した毛鉤にかすかなアタリを感じました。これは釣り師の反射なのですが、間を入れず合わせます。ウェット・フライは早合わせが大事です。と、竿先に生き物の躍動が伝わってきます。ヤッタ、かかった。道具に比べ魚は大きくないので取り込みにはあまり神経を使わなくていい。リールでやり取りをして取り込んだ魚は30センチ弱の細身のグレーリングでした。銀色の魚体に羽のように大きな背びれ。び

つくりしたような大きな目。オラバ川の水流をもっともせず泳ぎ回る華麗な、力強い魚でした。その時は一日がんばってもう一匹、合計二匹の貧果でした。

その後も2004年までオラバ川には何回か出かけました。何時もあり釣れないのですが、ポーランド国境近くの鄙びた雰囲気、釣り券を買いに何うシュテファネック老夫妻とのひと時、と何故か足を運んでしまうものがこの川にはあったのです。

この思い出の釣り場はもうありません。EUのお金が付いて、ポーランドとの幹線道路整備事業が進み、オラバ川沿いに時速100kmで走れるバイパスが出来た際、この釣り場は川底から浚渫され大きな橋が幾つも架かりました。この前もポーランドはクラクフへ車で走った時このバイパスを通りました。クラクフへ

の旅はちょっと便利になりました。そしてオラバ川の釣りとは地元の人達とのふれ合いは今回の駐在の懐かしい思い出の一つになりました。

一度だけシュテファネックさんと一緒に釣りをした事があります。オラバ川の鏡のような水面の場所に立ちこみ、年輩いた彼がかなりの遠投を決めてカゲロウを捕食するためライズするグレーリングを仕留める様はそれは見事なものでした。



ゴルフ部

パンノニアゴルフコース

山田 進

いよいよハンガリーもゴルフシーズンの到来となりました。紺碧の空に白球を打ち込む爽快感と緑の絨毯に立つ開放感、何ともいえません。さて本誌をお借りしてパンノニアゴルフコースを紹介します。

まず1番ホール、左に池があります。初めは腰の回りも悪く大抵の人は右にボールが行きます。但しAさんは特別、最初から渾身の力で振りぬきます。まあこの人腕っ節もただものではない、何しろ飛ばす事に命をかけてます。続いて2番ホール、飛ばし屋だったら狙いたくなる1オン、Eさんもこのコースで絶対1オンを目指すと宣言してます、今年が楽しみです。手前には深いバンカーもあり、コース設計者の術中にはまったら大変です。

次は見晴らしの良い打ち降ろしの3番ショートホール、ここは風だけに注意すれば良いでしょう。4番ミドルは比較的パーオンし易い。グリーンは砲台です、左はバンカーの餌食に、右から攻めるといっても右は狭い。

5番は結構面白い左ドッグレッグの景色の良いロングホールです。セカンドショットで注意しないと左側の林に捕まる。周辺のラフも重たく、何人もがこの罠にはまっています。6番は定例のドラコンホール、飛ばし屋のSさん、このホールの常連です。非常に綺麗なフォームでシングルハンデです。ピンが手前にある時は厄介です。上につけると大変、パットをするとボールがグリーンからこぼれて、最悪は池の際のラフまで転げ落ちます。

さて7番は難易度の高い左ドッグレッグ上りのコース、左のラフへ入れない事、右には池もあります、打ち上げなのでグリーンは見えません。8番はニアピンショートコースで風の計

算が必要なホール、右手には池やバンカーが。実に旨く設計されています。そして長いロングホール9番と続きます。ここは2打目を刻むかどうか飛ばし屋さんなら考えます、無理して前方の池に入る人を見かけます。私は絶対刻むのですが、3打目で池に入れてしまいます。単に下手というやつです。そしていよいよインへ突入です。この間、ちよつとしたおやつを持参してお菓子、パン、バナナと口にはおぼつてスタートします。

10番は一見簡単なようですが、右がラフ、左にバンカーあり山あり、グリーン右側には池もあり、叩く時は叩いてしまうホールです。次の11番は非常にタフなショートホール、右前方にブッシュがあります。グリーン手前はバンカー群で、グリーン奥もバンカーがあります。グリーンの傾斜も気になる所、ボールが乗ったと思うと、ズルズルと落ちてきてしまうのです。Mさんなんかは地団駄踏んでました。

ランニング部

通年申込み受付中

盛田 常夫

今年のランニングレースの申し込みは、現在のすべてのレースについて、受付られます。しかも、4月一杯までに申し込むとかなりの割引が行われます。今年の大会参加希望者は、通年参加予定レース、住所、氏名、生年月日を明記の上、私のところへメールで通知してください (morita@tateyama.hu)。とくに、マラソン、ハーフマラソンなどの国際大会は、インターネットの国際サイトから申し込むより、かなり格安になります。

レースへの参加を考えていらっしゃる方は、4月を過ぎても、なるべく早く申しこまれることをお勧めします。レースが近づくにつれ、参加費は高くなります。

マラソン、ハーフマラソン大会

●ブダベスト国際ハーフマラソン大会

9月7日。個人レースのほか、2名によるリレー種目があります。また、子供たちの3・5kmレースもあります。

●ブダベスト国際マラソン大会

10月5日。個人レースのほか、リレー種目、30km走があります。

個人ロードレース

●フローラ女子フェスティバル

5月17日。6・5km、3・8kmの個人種目のほか、3名のリレー(1・5km x 3)があります。

●ブダベスト10km

5月31日。5kmレースもあり。

●コカコーラ女子

10月19日。10kmの個人とリレー。3・6kmレースもあり。

マラソン・リレー

●K&Hマラソンリレー

例年、チームを作って参加している大会です。リレーだけの大会で、全国から500チームほど出場します。女子は3名でハーフマラソンチームを構成します。1人7kmがノルマです。

この他に、前座レースとして、2・1km x 3のレースもあります。昨年、日本人学校のチームが参加しました。

●フローラ女子、コカコーラ女子

既述したように、この二つの大会でも、リレー種目があります。



日本人学校

ブダペスト日本人学校中学部

答 辞

中学部第二期卒業生 小松 幹

早春の光を浴びて全ての命が躍動し始めた今日、僕たち中学部卒業生二名は、卒業証書を受け取りました。

約三年間をすごしてきたブダペスト日本人学校とも今日でお別れです。ここで作った楽しい思い出の数々が、今、走馬灯のように鮮明に甦ってきます。

ハンガリーに來たばかりの三年前、僕が一番の気がかりは、小さい頃からがんばってきた野球が続けられるかどうか、ということでした。幸運にも海外青年協力隊の方との出会いのおかげで、この地でも野球を続けることができました。その中でも特に心に残っているのは、去年、一昨年と行った

イタリア遠征です。一緒に寝起きを共にしたチームメイトはハンガリーを始め様々な国の人たちでした。僕はハンガリー語はもちろんのこと、英語もろくに話せません。しかし、人は、言語という『壁』を越えて心で通じ合えるものなのだ、ということ強く実感することができました。そして、一つのことを共に目指すとき、心は一つになるということ学びました。

もう一つ、僕はすばらしいチームに所属していました。ブダペスト日本人学校というチームです。宿泊体験学習、体育祭、ドナウ祭など、常にリーダーとしてのプレシャーがありました。それでもなんとか乗り越え、そして多くを学び、成長できたのは、いつも僕を支え励ましてくれたチームメイトたちがいたからです。

初めてこの校舎の玄関をくぐったあの日、僕の心は不安でいっぱいでした。登校初日からの三日間は話す相手すらいませんでした。そんな時、今は

もう卒業された先輩方が優しく接してくれました。あの時は本当に救われた思いでした。

やがて、僕にも後輩ができました。ただでさえ人数が少なく毎日孤独を感じて過ごしてもおかしくない中学校生活が、とても楽しく充実したものになったのも、後輩たちのおかげです。また、様々な行事に共に取り組んでいく中で、協力や団結することのすばらしさを教えてくれました。特に、ドナウ祭で取り組んだ和太鼓、本番で中学部がひとつになった瞬間のあの感動は今でも忘れません。ありがとう。

一方、三年間、僕には男子の同級生がいませんでした。そんな中、陽香さんの存在はとても大きかったです。毎日ふざけたり口げんかしたり、様々なものを共に作り上げたりしてきました。今では性別なんて問題ではなく、最高のライバルであり最高のチームメイトだと、断言できます。今まで本当にありがとう。

また、この日本人学校には個性豊かで情熱的なコーチたちがいます。先生方です。この三年間、失敗したり迷惑をかけたりしたこともたくさんありましたが、そんな僕をやさしく時には厳しくご指導してくださいました。心から感謝しています。ありがとうございます。

お父さん。お父さんは、僕にとって名監督でした。いつも僕に活を入れ、時には道を示し、そして勇気を与えてくれました。お母さん。お母さんは、いつも僕の側に立ち、時にはわがままを聞きいれてくれ、常に支えてくれたマネージャーであり、応援団でした。そんな二人ともしばらく離れ離れで暮らすことになりましたが、僕は大丈夫です。日本でも元気に一生懸命がんばります。それよりも、二人とも体には気をつけて元気で過ごしてください。再会できる日を楽しみにしています。明日から、僕の新たな人生が始まります。これから様々なことがあると思

いますがそれらを乗り越えて、成長していきたいと思います。そして数年後、胸を張ってこう言います。今の自分があるのは、日本人学校で出会った人々、日本人学校で過ごした日々があったからだ、と。

僕の母校、ブダペスト日本人学校は、世界で一つだけの学校です。その「日本人学校らしさ」をこれからも輝かせ続けてください。遠い日本からその輝きを見守っています。



答 辞

中学部第二期卒業生 佐藤陽香

日に日に春が近づいていることを肌で感じる今日この頃、私がハンガリーにやってきた二年前も、そんな季節だったように記憶しています。

その二年前と今の私を比べてみると一つの大きな変化があります。それは、今ははっきりとした夢がある、ということ です。その夢とは、「世界中の子供たちを救いたい」という夢です。

私はハンガリーに来て以来、ハンガリーをはじめ、周辺の国々を旅行する機会にも恵まれました。その機会を通して、私は世界の子供たちの予想以上に悲惨な現状を知りました。なぜ私よりも小さな子供たちが学校にも行けず、路上で働かなくてはならないのでしょうか。なぜ、戦争の犠牲者にならなければならないのでしょうか。

私はそんな彼らの現実を目の当たりにし、このような悲劇をなんとかし

たいと強く思うようになったのです。私の力はまだまだ小さいけれど、困っている人がいれば、手を差し伸べられます。言葉が通じれば、いえたとえ通じなくても一緒にお話ができます。もし悩みがあれば聞いてあげます。たとえその人に何もしてあげられなくても、一緒に泣いてあげることにはできます。全ての人を幸せにすることは不可能かもしれませんが、それに少しでも近づくことは出来ます。

私がこのような夢を持つようになったのも、ハンガリーに来て、そしてこの日本人学校で多くの人と出会い、多くの体験を通して学ぶことができたからです。

今思い返すと、宿泊体験学習をはじめ、運動会、ドナウ祭とたくさんのことを経験してきました。生徒会長や応援リーダーなど『学校の中心』という立場も経験する事が出来ました。またハンガリーの人々との交流を通して、言葉を越えた『思いやり』が人として

いかに大切であるかを学びました。それらの経験で私は一回りも二回りも成長する事が出来ました。今そう言えるのも常に私を励まし支えてくれた人たちがいてくれたからです。

幹君。幹君とは、中二から同じ教室で学びました。最終的には二人だけの学級になってしまいましたが、それでも私が今まで楽しく過ごせたのは幹君がいたからです。昨年度の先輩の卒業のために作った歌や文化祭のときのクレイアアニメなど、二人で作り上げた作品はたくさんありますね。私はそれらを作っているときも発表しているときも、いつも楽しく充実した気持ちでいっぱいでした。

中学部の皆さん、学年の壁を越えていっしょにたくさん思い出を作ってきましたね。大変な事もたくさんありましたが、その分みんなの絆が深まったと信じています。皆さんはこの学校の中心であり、リーダーでもあります。これからよりよい日本人学校を

築き上げていってください。

小学部の皆さんはいつも元気いっぱい、学校の雰囲気も明るく感じられました。皆さんと共に過ごせたことが本当に嬉しかったです。

先生方、私が困っているときや悩んでいるときにいつも力になってくださいました。普段の授業でも、分かります。先生方と出会えて私は、日本にいたときには出来なかった考え方で物事を考えられるようになりました。

お父さん、お母さん、ハンガリーという外国に来ていつも不安でいっぱい、の生活でしたが、両親の支えのおかげで、今日無事に卒業の日を迎えることができました。これからもたくさん心配をかけてしまうと思いますが、私はここで見つけた自分の夢に向かってしっかりと歩んでいきます。

私は、このブダペスト日本人学校で過ごせたことをとても幸せに思います。日本人学校の卒業生であることを

誇りに、これからの新しい人生を精一杯生きていきたいと思います。みなさんも、この日本人学校で夢を見つけてください。ここにはそのチャンスが無限に広がっています。卒業生としてこれからもずっとみなさんのことを応援しています。いつまでもお元気で。さようなら。

小学部卒業の言葉

小学部6年 大島 優

日本人学校では、日本ではできない体験をたくさんしました。私にとって思い出深いのは漢字検定です。漢字が好きになりました。このような体験ができたのは、日本人学校に来たおかげです。今でこそ、ハンガリーにいることが当たり前になってしまいました。が、とても貴重な経験をしているのだと思います。この経験をこれから活かしていきたいと思います。日本人学校、ありがとう。

小学部6年 恩田依以子

私は三年前、ハンガリーに引越してきました。初めは実感することができませんでした。でも、ここに来てみると日本では見ることができないものを見たり、経験できないことを経験できたりしました。心配していたハンガリー語も少しずつ覚えられるようになりました。何ごとでも実行してみることの大切さを学びました。中学生の私も実行する私でいたいと思います。

小学部6年 小松 愛

二年前の八月、私はハンガリーに来ました。教室に一人ずつ座っていてもさびしい毎日でした。日本の方がいいと思いました。でも、今は違います。今は日本人学校のほうが好きです。何も知らなかった私を、ここまで育ててくれた、おとうさん、おかあさん、そして先生方に心から感謝します。友達といっしょに過ごした日々は一日一日が大切な宝物です。いっしょに笑っ

たり、泣いたりできる友達がいて、私は幸せでした。

小学部6年 島戸優輝

ぼくは、三年前にハンガリーに来ました。初めは少なかったクラスメートもだんだん増えて楽しいクラスになりました。そんな日本人学校が好きになりました。日本に帰るまでに、この日本人学校でしかできない経験を、精一杯しようと思います。こんなきっかけを作ってくれた、お父さん、お母さん、ありがとうございます。そして、見守ってくれてありがとうございます。

小学部6年 船山 憧香

私は日本の友達と別れるのがいやでした。でも、日本人学校に行くようになって、友達の人一人ひとりと仲良くなれました。日本人学校でしか体験できない行事もあって、一生懸命取り組みました。一番印象に残っているのは夏期合宿です。班長をして、下級生とす

ごしたことが、大変でしたがよい思い出です。私は中学生になります。今まで私を支えてくれた、お父さん、お母さん、先生、そしてみんなありがとう。

小学部 6年 船山聖奈

小学校生活最後の一年間は、私にとってとても充実した楽しい年になりました。日本人学校は生徒の人数が少ないので、同じ学年の人たちだけでなく、他の学年の人たちとも仲良くなれたことが、印象に残っています。中学校では新しい教科が増えるので、楽しみです。今まで私を温かく見守ってくれた、お父さん、お母さん、先生方、ありがとうございます。

小学部 6年 松下隼也

ぼくは日本人学校に転入しても、なかなかなじみませんでした。でも、学校に慣れてくると、だんだん楽しくなってきました。夏期合宿のように日本

では体験できないようなことも、ここでは体験することができました。苦手の教科も少しずつわかるようになってきました。今では、ハンガリーに来てよかったと思っています。中学部でも体験をたくさんして、成長して、日本に帰りたいです。

小学部 6年 山下芽惟

困ったときに助けてくれたのは、お父さんやお母さん、先生方や友達でした。難しい問題が解けなかったとき、悩み事があったとき、自分を支えてくれる人がたくさんいることを知った六年間でした。中学生になったら、自分で何でも見つけようと思っています。中学生になっても、自分はいろいろな人に支えられて生きているというのを忘れずに、人を支えられるような人間になりたいです。

小学部 6年 古賀絢子

私は日本の小学校で卒業して、日本の中学校に入学すると思っています。ハンガリーの学校に転校することになったときはとても驚きました。こへ来てから半年くらい経ちました。いろいろなときに支えてくれた、友達、お母さん、お父さん、先生方、そして在校生のみなさん、ありがとうございました。在校時代はあっという間です。そんな小学校時代を楽しく過ごしてください。

小学部 6年 守谷祐貴子

私は今年、日本人学校に入りました。とても短い間だったけれども、みんなと勉強したり、遊んだりして、本当に楽しかったです。このブダペスト日本人学校に来て、みんなと出会えて本当にうれしかったです。私は中学校に入ったら得意な英語をもっと伸ばしたいです。そんな私をこれからも見ていてください、お父さん、お母さん。

みどりの丘日本語補習校

お父さん・お母さんも

頑張っています

二〇〇七年度運営委員 山内 寿恵

みどりの丘日本語補習校（以下、「みどりの丘」）には、ハンガリーと日本の両方の国籍を持ち、まさに存在そのものが「日本とハンガリーの架け橋」といえる愛らしい子供たちが主に通っています。中には両親ともハンガリーの方のお嬢さんもありますし、遠くはスロバキアから通っている熱心なご家庭もあります。その中で、我が家の娘は、両親ともに日本人ですが、普段はブリティッシュインターナショナルスクールへ通っていますので、二〇〇五年開校以来「みどりの丘」でお世話になり、学年相当の国語の学習を続けています。

「みどりの丘」開校時、小学4年生で入学しましたが、今年の春、「みどりの丘」小学部を卒業します。

私たちが赴任したのは二〇〇四年夏、まだ日本人学校はなく、前身の補習校があっただけです。多くの日本人子弟が通うアメリカンではなく、家から近いなど、我が家にとって条件の良かったブリティッシュスクールへ、4歳下の弟と一緒に編入させました。もちろん、二人とも最初の一年は学校での生活に慣れるだけで大変でした。母親として、それを見守り、励ましつつ大げさに褒めながら、時には一緒に泣きました。それから少しづつ、うちの娘はまず最初に ESL（英語が母国語でない子供のための、英語の特別授業）で自分の居場所を見つけ始め、4年かかって他の科目の授業にも、最近ようやくと、ついていくことが出来るようになったかな、という感じです。今思

えば、運良くたくさんの、それこそインターナショナルなお友達や、多くの素晴らしい先生に恵まれ、いつしか今のブリティッシュでの学校生活が、彼女にとってかけがえのないものとなりました。弟が小学一年に上がる年、彼と一緒に日本人学校へ転校させるつもりでしたが、本人の熱意だったの希望もあり、親として本当に本当に迷いましたが、娘だけは今のブリティッシュスクールに通い続ける、という選択をしました。

ただ、私どもは、赴任した直後から間違いなく日本への帰国が数年後にはあるわけで、子供は帰ったら普通の、公立の学校へ（欲をいえば平均点くらいを保ちつつ）戻れたらいいなあ、と考えていました。なので、前身の補習校にももちろん通い、国語と算数を補習していただきました。二〇〇五年4月、日本人学校が開校

すると同時に、補習校は閉校するのは分かっていましたので、これからはどうしよう、と不安に思った矢先に、新しく補習校が開校すると聞き、救われる思いがしました。

普段、英語漬け（他の子供たちはハンガリー語漬け）の学校生活を送りながら、学年相当の国語の学習を続けるとなると、家庭だけでは到底指導しきれません。外国に來たんだから、普段の学校が大変そうだから、等といって、何でもいっぱい吸収できる子供たちへの国語の学習をおろそかにしないで下さい！親ではない、第三者である学校の先生が出す宿題だからこそ、子供も頑張つてできるのです。クラスのお友達の前で、恥をかきたくないし、ちよつとでも余分に知っているのを見せたいから、学習も続くのです。また、うちの娘の場合は、ブリティッシュスクールでの成績表は、初めのうちはさんた

んたる結果でした。そんなの気にしなくていいんだよ、と励ましましたが、そんな母親の言葉よりも、補習校での成績表が、はっきりと目に見える結果として大きな励みになるのです。「日本語だったら、私だってこれくらい出来るのよ！」と。

「みどりの丘」は、自分の子供に何とか国語の学習を、という強く熱い思いのある親達が集まって、まずは最初に準備委員と呼ばれる方々が、ゼロから準備をして開校にこぎつけた、と伺いました。初年度、なにも分からず、でもとにかく娘に、と思つて入学させましたが、すぐに運営委員として手伝つてほしい、と依頼がありました。周りを見渡すと、声をかけてきた方とうち以外には、他に両親共の日本人家庭はありません。日本人であり、母親である以上、断れる状況ではありませんでした。準備委員の方々が何もかも初めてだ

ったのと同じくらい、初年度の運営委員も何もかもが初めてでした。先生のお給料以外に交通費はどうするのか、夏休み前、ボーナスはどうするのか、夏休み前に突然、一人の先生がさつそく退職願を出してきました、さあ、代わりの人はどうするか・・・

三年めの途中で、運営委員に欠員が出て、再度引き受けることになりました。三年めは、夏休み明けに同時に五人の子供が退校・休学することとなり、当初立てた授業料計画と大きく違つてきました。どの家庭も授業料値上げは嬉しくありません。授業料を上げずに自分たちで収益をあげる「みどりの丘クリスマスカードプロジェクト」が企画・運営され成功しました。毎年、試行錯誤、工夫と挑戦の連続です。

私たち駐在員と、二重国籍の子供の家庭などでは、補習校に何を、ど

れくらい求めるのか、といったニーズはそれぞれ異なることでしょう。でも、日本語と無縁の異国の地で暮らす子供たちに、少しでも日本語を！国語の学習を！と願う気持ちは同じです。これからも「みどりの丘」が、わが子に継続的な国語の学習を求める親達の大きな助けとなり、子供たちにとっては、大変ながらも楽しく国語の学習が続けられる場所であり続けてほしい、と切に思います。そのためには、一人でも多くのお子さんとそのご家庭が、「みどりの丘」に関わって、盛り上げていっていただきたいと願うのです。

最後に、娘はこの4月から、中学一年です。「みどりの丘」では中一クラスは初めて、しかも生徒一人。その一人のために一クラスを作ってほしい、というわがままは運営に深く関わる委員として言うことができませんでした。小6クラスで復習を、

とも考えましたが、担任の先生が「6年生をもう一度なんでもつたいたい。十分中一になれるですよ」と言ってくさり、小6・中一の複式で見てくださることになっています。これも手作りの学校ならではのすし、3月末には、「みどりの丘」初の卒業式も予定しています。



ちいさな関係

1年生担当 大山 彩

「大山せんせい！」と呼ばれるようになって半年近く経った。今でもそう呼ばれるとなんだか照れくさくなってしまう。私にとって2人の生徒と過ごす時間は不安の連続であり、学習の時間でもある。

事前に前任の先生から子ども達の事について少し話は聞いていたものの、一体どんな事に興味があつて、今までどんな風に授業を受けてきたのかをたった一度の見学で知るには無理があつた。遊びを取り入れながら学習を・・・と考えていた私なのだが、最初の授業で「こんな遊び、したくない。」と言われてしまう。マズい。その時点で授業の残り時間は三十分……。急に時間の流れが遅くなったように感じる。私の頭はフル回転で動いているものの、周りはかなりのスローモーション

ンだ。

この日から私は『第二の策』を用意するようにした。私が好しと思う事を必ずしも子供達が好んでするとは限らないのだ。小学校で教員をしている知人が「引き出しを作ることが大事だよ」と言っていたのを思い出した。

すぐろくを作ったときもあった。さいころをふって、とまった所に書いてある課題をこなす、といった感じだった。ところが反応は思っていたよりイマイチ。子ども心という物もなかなか難しいものである。子ども達にとって難しすぎず、簡単すぎず、意欲を持ってしっかりと取り組める課題を作る事は、将来教員を目指している私にとっての課題である。

子ども達が気に入っている遊びの一つに「しりとりジェスチャーゲーム」がある。(しりとりをするとその子がどういう事に興味がある

か、また語彙力をみる事ができる)これは普通のしりとりのように進めていくのだが、自分が思いついた単語を体で表現して他の人はそれが何かを当てる。これがなかなか面白い。もうオトナの脳みそになってしまった私には考えもつかない表現をする時は思わず感心してしまう。どうしても何かを言い当てられなければ「これは緑色をしていて大きさは・・・」という具合にヒントを出すことも言葉の練習になるので、このしりとりゲームは授業の余り時間や休み時間に取り入れるようにしている。

実質、先生として子ども達に「教える」立場にある私だが、子ども達に教わる事も多々ある。例えばハンガリー語。語学を学ぶにはまず「聞く」作業から入ると色んな人に聞いた。実際、普段使う単語を並べるだけでもハンガリーに來た当分のことを考えると随分語彙力は伸びた

と思う。けれど授業の一環で学校の敷地内にある植物を集めにいった時、自分の語彙力のなさに改めて気づかされた。子ども達が次から次へと植物の名前をあげていく中、私は一人「今紙とペンがあつたらな・・・」なんて思っていた。

また、前にも書いたように自分が思いもつかなかったことを気づかせてくれたり、なにより補習校での時間は私にとって生きた実習の場でもある。大学で勉強している教育学、心理学、音楽指導法で習った授業案の立て方など・・・それを実践できる場であり、子ども達はそれに対して素直に反応してくれる。そういった意味では私と子ども達は「ギブアンドテイク」の関係だと私は思っている。

冒頭に書いたように今でも暗中模索、不安の連続である。週末が近づくにつれそんな気持ちも膨れ上がる。私は自分自身のことを「教員の卵と思



っていても、子ども達の前では一人の「先生」なのだ。(そう思われているか定かではないが・・・苦笑) 週一度の補習校での時間。そんな決して多くはない限られた時間の中で、自分なりに一つでも多くのことを教えていくとともに、「ギブ アンド テイク」のこのちいさな関係をこれからも深めていけたらと思い願っている。

子どもたちとともに、日々成長

3年生担当 渡辺 薫

二〇〇七年七月にブダペスト入りした私は、ハンガリーの学校の二学期が始まる九月のはじめ、みどりの丘小学校から「補習校の先生をやってみませんか」というお誘いを受けました。子どもと関わる仕事をしてみたいと常々望んでいた私にとっては、本当にうれしいお話で、まだ右も左も分からないうちにふたつ返事で引き受けました。日本にいたころには小学生に対する塾講師としての経験はあったものの、ここはハンガリーの日本語補習校ということで、日本に勤めていたときにはまた違ったニーズへ対応していく必要があります。また、四時間ずつと続く「国語の授業」ということで、子どもたちの集中力をいかに持続させるかというインパクトと計画性のある授業を組み立てていか

なければなりません。そんなことを考えながら、はじめの授業を試行錯誤しながら組み立てました。

九月の第一週目、どきどきしながらドアを開けると、・・・だれもいません。「あれっ」と思って教室の奥に進んでいくと、ロッカーの後ろからくつくつと笑う声。そして、「新しい先生？」と私を笑顔で受け入れてくれた男の子たち。これが私と三年生の児童との出会いでした。夏休みが終わったばかりで、私も子どもたちもまだ夏休みの余韻が抜けきらない中、家族や友達との夏の思い出などを語り合いながら、徐々に打ち解けていったのを覚えています。それからあっという間に月日は流れ、はじめての出会いからもう五か月がたとうとしています。はじめのうちは私が聞いたことに対してぽつりぽつりと一問一答でしか答えてくれなかった子どもたちも、今では授業中の質問に対してはもち

ろん、休み中に家族と車で外国旅行をしたこと、空手をがんばっていること、妹ができた喜びなどを、自分の感情をこめて精一杯表現してくれるようになりました。三人という少ない人数で、それぞれの得意な分野は違っても、教室の中ではお互いに意見を交わしあい、間違ったところを確かめ合い、アドバイスしながら、毎回一歩ずつ確実に、たくましく成長しています。

そんな子どもたちに、私が小学生だったころ、担任の先生が紹介してくださった次の詩を送りたいと思います。これは一九六七年当時、中学二年生の担任だった蒔田晋二先生という方が、自分の生徒に送った詩だそうです。全部を載せることはできませんが、私が子どもたちに伝えたい四つの連を掲載したいと思います。

「教室はまちがうところだ」

まきた しんじ

教室はまちがうところだ

みんな どしどし 手を上げて

まちがった意見を言おうじゃないか

まちがった答えを言おうじゃないか

まちがうことを おそれちゃいけない

まちがったものを ワラっちゃいけない

まちがった意見を まちがった答えを

ああじゃないか こうじゃないかと

みんなで出しあい 言い合うなかで

ほんとのものを 見つけていくのだ

そうしてみんなで 伸びていくのだ

まちがいだらけの 僕らの教室

おそれちゃいけない ワラっちゃいけない

安心して 手をあげろ

安心して まちがえや

まちがったって ワラッたり

ばかにしたり おこったり

そんなものは おりやあせん

まちがったって 誰かがよ
なおしてくれる 教えてくれる
困ったときには先生が
ない知恵しぼって 教えるで
そんな教室 つくろうやあ

教壇に立ち、「教える」という立場になった私も、この詩を自分に言い聞かせながら、日々子どもたちとともに成長していきたいと思っています。これからもどうぞ、よろしくお願いいたします。



一年をふりかえって

課題別クラス担当 原田 知加

緑の丘小学校で日本語を教えると言う機会を頂いてから、はや一年半が過ぎようとしています。昨年の四月から課題別クラスと言う新たに設立されたクラスを担当するにあたり、普段日本語に触れる機会のない子供達に日本語を教えてきました。周囲の日本語を見聞きすることにより、学校で学ぶ前からある程度の日本語の基本を自然と身につける環境にあった我々とは異なり、「勉強」としての日本語をどのように彼らに体得してもらうか、課題別クラスを任せられるにあたり正直申し上げて頭を抱えこんでしまったことを思い出します。

課題クラスでの一年をふりかえり、自分なりに考えたアイデアや生徒や保護者の方々、委員会の意見も参考にしながら、教科書だけに頼らず童

話から科学的な内容まで、彼らが関心を持つようなテーマを折々に混ぜながら、興味を呼び起こすような題材を使用して試行錯誤の日本語学習を進めてきました。この一年近い期間で彼らの日本語に対する関心が深まり広がる機会を作れたことを切望しますが、基本的に教科書だけの授業を行ってこなかった分、各学年の定める学習要綱からそれたものであったでしょうし、毎回生徒たちが関心を引きような新しいテーマづくり集中し、時には立ち止まり学習したことの復習をするような時間を割くことがままならなかった感もなきにしろはありません。

次年度の課題別クラスについては廃止される方向でと聞いてはいますが、補習学校に通う生徒や保護者の各々の関心や日本語を学ぶ目的の違いもあるので、廃止が決定されれば個人的には非常に残念だと思っています。学期末までの限られた時間で

はありますが、残された時間を最大限に活かして私の受け持ちの生徒のレベルが4月から編入する学年のレベルに達するようベストを尽くす所存でございます。委員会や保護者のみなさまにはこれまでの学習サポートに対して感謝の意を表すとともに、今後もこれまで以上に目標達成のためのサポートをお願いしたく、この場をお借りしてお願い申し上げます。

話は変わりますが、昨年の秋に私の受け持つ生徒たちがそれぞれ日本を訪問しました。滞在先で誰と日本語をどれほど使用したのか想像の域をでませんが、二週間近い滞在のあの授業に参加した生徒たちからは日本語を使用することに対する積極的態度が明らかに見て取れました。この積極的態度が継続しているうちに、と先日の学習発表会では殆どアドリブで方言を交えた大阪と東京の違いをテーマにした漫才を演じる彼らの姿を保護者の方にはご覧頂いた

のですが、いかがでしたでしょうか。
日本語の台詞で観客を笑わせること
までできた彼らの成長を私は高く評
価したいと思います。

その日本滞在中の話に関連し、生徒の一人が恐らく同じ年ぐらいの友人たちとたくさん話をする機会があったのでしよう、今時の若い方たちが使うような言葉遣いや表現を覚えて帰ってきました。作文を添削している際に気づき、文法的には正しくないために訂正をしたのですが、日本の友人たちはこのような言葉や表現を使っていたとの反論をうけました。日本語が衰えていく、日本語が死んでいくと嘆く声が議論され始めてから久しいですが、日本に帰国するたびに見聞きする日本語を嘆く一方で、これらの若い人たちに使われる言葉も他方では生きた日本語なのであるとあきらめと同時に納得したものです。どのような形であれども、日本語を学びたいと思う子供たちが

これからも生きた日本語に触れられる場を「みどりの丘小学校」では末永く提供していったて頂きたいと切に願うところです。



ありがとう、複式クラス

5・6年生担当 フルディ満名実

春四月。かわいらしい新入生を迎えた補習校に、最高学年六年生と五年生が同じ教室で机を並べて学びあう複式クラスが誕生しました。五人（現在四人）でスタートしたこのクラスは、別々の教科書に基づいて学年別に授業が進むときもあれば、共通のテーマについて意見交換しつつ知識を深めたりしながら、後期も半ばを過ぎました。共に学ぶのもあとわずか。三月には六年生二人は卒業式を迎えます。

いわゆる複式クラスを担当するにあたり、まさに試行錯誤の連続の毎日を送ってまいりました。限られた授業時間内に、まったく能力の異なる子供たちに、一学年ならまだしも二学年同時進行で、同じ時間内に違う授業を展開しなければならぬのです。もちろん、準備の時間も二学

年分。去年二年生を担当していたころと比べても倍以上の時間が補習校の準備に費やされています。私事で恐縮ですが：

文章読解のほか、当たり前の授業を進めていたのでは、とても時間が足りません。そこで、授業展開には思いつく限りの工夫を凝らしています。そのうちの 하나가、共通のテーマ探しです。授業の中で、個人別の苦手を見つけます。苦手数が多いものから、それに近い内容の単元を教科書から見つけ出し、時にはこじつけ(笑)、学年別ではなく同時にその苦手を学んで練習してしまおうというものです。漢字学習はまさにこの中でも重要なものの一つ。個人別に復習プリントを宿題として出してテストをしたり、教科書巻末の小学校学習漢字表を利用したの熟語の意味調べと短文作り、教科書の課題・漢字の広場を使って、そこに出てくる熟語をゼーんぶ使ってゲーム感覚で

文章を作ったり：これは、個性とユニモアあふれる文章が飛び出すこともあり、楽しませてもらっています。が：新出漢字を含む五つの熟語を四時間の授業内で覚える！と目標を持って四時間目に黒板に聞き取りテストをしたり、と、漢字を覚えて、その熟語と共に単なる知識で終わらせるのではなく、覚えた言葉を使えるようにすることをモットーに進めてきました。「今日のことわざ、四字熟語コーナー」では漢字と同時進行でことわざなどをも知ること为目标にして毎回行っています。また、両学年に共通していた環境問題について考える課題では、日本でのことは日本生活の長い生徒の発表にとどめ、むしろハンガリーに身近な国や地域、世界共通の問題についてテーマを集めた教師の発表を聞いての感想をまとめたりしながら、壊れていく地球の自然を守るためには一人一人の自覚が大切であることを学びました。

なお、この共通の時間では、生徒たちの知りたい気持ちを大切にしていきます。教室には社会科資料集等が自由に閲覧できるようにしてありますが、その中から興味を持ったこと、たとえば日本列島や天皇家、日本書紀や平安貴族の暮らしぶりなど様々でしたが、そんなことについても知る機会を設けています。これは、この補習校を卒業してしまつて日本の教育に触れることがなくなつてしまふであろう生徒のことを考え、少しでも興味のあることを幅広く知つておいて、将来のために知識のストックをしておいてほしい、との私の願ひから生まれた時間です。資料が少ない中、生徒たちの協力で本を借りたり、インターネットで情報収集しながら教師がまとめたことを聞いた時、時には資料をもとに生徒たちが文章をまとめたりして、聞き取り、読解、文章まとめの勉強の時間にも当てています。

夏休みを前にしては、日本人向けハンガリーガイドブックを共同作成しました。これは授業参観日を利用して父兄にハンガリー名所をインタビューし、各々一ページを担当して取材レポートを書いてまとめたものですが、同時に日本とハンガリーの国土や気候・国旗・国章や、天皇家についても分担して調べました。また、先の学習発表会では、上記環境問題リポートのほかに、この時間に行った、3人の歴史的文人（紫式部、松尾芭蕉、宮沢賢治）についての資料をまとめたことをも発表しました。

人間の記憶はより印象のあることであればあるほど脳裏にはつきりと刻まれ、普段忘れてしまっているものもふとしたことがきっかけとなってよみがえるものです。私は、週一回の補習校だからこそ、この記憶の作用を利用し、何とか印象に残ることを授業で取り上げて、生徒たちの将来に働きかけることができれば：との

夢を持っています。補習校を卒業して、日本から：国語から遠ざかってしまっても、大人になったとき、この学習発表会で行った「迷信にも負けないでね」というオチのついた「雨ニモマケズ」の劇を思い出してくれたら：紫式部の生きた時代に興味を持つてくれたら：松尾芭蕉の俳句に研ぎ澄まされた日本語の美しさを感じ出してくれたら：そのときこそ、本当に生きた学習のきっかけが生まれ、生徒自身が人生の真の財産を得ることができるようになるでしょう。その日のことを夢見ながら、今日も次の授業のことをあれこれ考えているのです。

補習校でのことは、私自身の人生においてももちろん大きな財産になっています。生徒たちとのかかわりや何気ない言葉のやりとり、授業のためにあれこれ考えながら費やしてきた時間も、情報収集の度に知った様々な知識も、何もかもすべてがい

うまでもなく私の一部となっていてます。いろんなことに興味を持ちながら視野を広げていく：これは人間が輝いて生きていくうえでとても大切なことです。子供たちに、限られた時間を大切にしながら充実した一生を送ってほしい：傲慢ではありませんがそのための小さなお手伝いができる補習校での仕事を、私はとても大切に思っています。



「牡牛座・レーニンの肖像」

盛田 常夫

以前の職場の同僚、下斗米伸夫教授（法政大学）から、奇才ソクローフ監督による「牡牛座・レーニンの肖像」の映画評をもらった。ちょうど日本出張を控えていたので、急いで上映館を探した。渋谷のユーロスペースという小さな劇場で上映している。この映画館は大衆的な上映には向かない良質の作品を見せている。東急本店と道玄坂を結ぶ狭い通り面していて、地図を片手に一つ一つビルを確認して歩いたが、この辺りは渋谷の色街のよう。昼下がりに歩くのはちょっと白けるが、ユーロスペースはこのアンバランスな立地に小さなスペースを確保している。とにかく上映最終日になんとか滑り込ん

だ。

この作品は権力者を描いた4部作の第2作目（2001年制作）。1作目はヒットラーの愛人が待つザルツブルグの山岳地帯にある別荘でヒットラー一行が過ごす時間を扱った「モレク神ーヒットラーの日々」（1999年）。3作目は天皇ヒロヒトの終戦前後の生活を扱った「太陽」（2005年）。4作目は「ファウスト」をテーマしたもののだが、まだ完成していない。イッセー尾形が演じる昭和天皇が話題になった「太陽」や「モレク神」はすでにDVDになっているが、「レーニンの肖像」は今年2月が日本初公開でまだDVDになっていない。ソクローフの作品はほとんどが日本語版でも外国語版でもDVDで入手可能だが、この「牡牛座・レーニンの肖像」だけは、何故か未だDVD化されていない。ユーロスペースでの上映が終了したので、これから販売されるのかもしれないが、

今現在はこの作品を鑑賞する手だてがない。

ストーリー

これまでの3作に共通することだが、ソクローフの作品には通常の意味のストーリーはない。あるのはそれぞれの権力者の日常生活を見せるというモチーフだけである。とくにこの作品は、半身不随のレーニンの日常生活を90分の時間を使っただけで、映し出すだけで、他の2作に比べてはるかに単調なのだが、セリフ撮影がないこともあって、逆に迫真に迫るものがある。

舞台はモスクワ郊外の森にある瀟洒な館。1918年に狙撃され、その後遺症か脳梗塞の発作の影響で半身不随になったレーニンが静養している。新聞も電話も取り上げられ、外界からのコミュニケーションは遮断され、レーニンは自分の意思で外部とコンタクトをとることができな

い。ドイツ人医者、妻のクループスカヤ、妹のマーシャ（マリーア）が付き添っている。館にはソ連共産党が配置した警護官や調理・清掃を担当する賄い人がある。レーニンを警護しているのか、それともレーニンの状況を党の指導部に報告する諜報部員なのかは定かでないが、その両方の人々が配置されている。

ベッドで新聞を離さないレーニンの手を警護官が叩き取り上げる。子供やふつうの痴呆老人のような扱いを受けている。ロシア革命の理論的・政治的指導者のレーニンが、である。舞台になった1922年の夏は最初の脳梗塞の発作の後で不自由はあったが、まだ頭脳明晰だったはず。だから、このような仕打ちは受けてないだろうが、映画は「半身不随で痴呆が進んだレーニンをスターリンが隔離・監視し、レーニンから自由意思を奪った」というトーンで全体が構成されている。

ドイツ人医師は「レーニンが亡くなれば、自分は抹殺されるだろう」と呟きながら、レーニンの相手を務める。「回復するのか」と問いつめるレーニンに、この医者は「17x22の計算できるようになれば回復する」という。17はロシア革命の1917年から、22は静養している時点の1922年からとられた数字か。レーニンは繰り返しこのかけ算をやってみるが、できない。痴呆老人のリハビリが映し出される。

天気の良い午後は散策と決まっていって、レーニンは「狩り」と呼ばれる遠足を楽しみにしている。「狩りに行きましょう」と言われ、喜び勇んで車に乗る姿は、身動きが不自由な老人が介護施設の車に乗せられて、束の間の外出の自由を満喫しているような風情なのだ。車上のレーニンはまるで子供のように、手でピストルを撃つ真似をして、「狩猟ごっこ」を楽しんでいる。ここまで痴呆が進

んでいたはずはなく、これも映画の演出の一部。この遠足の間も、諜報部員がレーニンの動静を探っている。

ある日、お供を従えて、丈長の白いコートに身を包んだスターリン（ソ連共産党書記長）がやってくる。党内権力を奪取したスターリンがレーニンの現状を確認にきたのだ。スターリンは党中央委員会からの贈り物と称して杖を渡す。スターリンと会するレーニンは正気に戻り、政治局の了解を得て毒薬を持ってくるように請う。

スターリンが帰り、夕食に臨んだレーニンにたいして、妹は「貴方が死ねば、我々はここから追い出されてしまう」と言う。レーニンが生きている限り、今の生活は保障されるが、死んでしまえば路頭に迷うだけだ。ところが、レーニンは訪問者が誰だったか思い出せない。妻が耳打ちする。「あれはユダヤ人か、それともグルジア人か。スターリン（鋼

鉄)、カメーネフ(岩石)、モロトフ(ハンマー)……。なんという恐ろしい名前だ」などと、次第に党の対応と自らの不能に苛立ちを示し、わめき出して夕食のテーブルを壊してしまう。

車椅子に座り、ベランダで物思いにふけるレーニンとは、自らの精神と肉体の崩壊を嘆き、大きな叫び声を上げる。人間の叫びとも、獣の叫びとも区別のつかない「ウォー」という音が、森中に響き渡る。

人としての限界―「レーニン信仰」の破壊

この映画を通して、ソクーロフは何を語りたかったのだろうか。いかなる偉大な個人であれ権力者であれ、究極のところ、他の凡庸な人々と同様に、1人の人間に過ぎないということか。人が神でありえない以上、偉人も凡人も、美人も不美人も、同じように病に倒れ、苦しみ、悩み、

老い、やがて死を迎える。人である限り、このプロセスに例外はない。違いがあるとすれば、緩やかに静かに老いていくことができるか、それとも突然の病や事故に遭い急死するか、それとも後遺症に悩み人生を苦しみながら終えていくかだけだろう。

華々しい活躍を遂げた人々にとって、突発的な事故や病気の急変は、想像しがたい苦痛を与える。絶世の美貌が失われていく女優の苦悩も同じだろう。ノイマンが癌に冒され、脳に転移したことを知った時の悲しみと苦しみは、凡庸な我々には想像もつかない。第一線の研究からは一歩退いたとはいえ、神のものとも驚嘆されるノイマンの博覧強記は、社会の種々の分野でもう一度開花する力をもっていた。しかし、それが適わぬことを知ったノイマンは、叫び苦しんだ。「往生際が悪い」と批判した者もいたが、人生半ばで終えざるを得ない無念は想像を絶する。

ロシア革命は実現したが、実際の社会建設は始まったばかりだった。レーニンの本当の仕事はこれからだった。しかし、そこに凶弾が打ち込まれ、それが原因で脳梗塞を患い、やがて発狂する悲劇となった。現実の困難を乗り越えるために、新生ロシアは軍事的な社会主義へと突進したが、「もしレーニンが健在で、粗野なスターリンの台頭を抑えることができていれば」と考えた人は多い。「もう少しは増しな社会主義ができていたのではないか」と。しかし、1人の人間ができることは限られている。どんなに優れた人物でも、20世紀という時代制約や、ロシア社会の限界を超えて、社会主義やロシアを飛躍させることなどできるはずがない。ロシアに根強いレーニン信仰を破ることが、ソクーロフの仕事だったのだろうか。カンヌ映画祭でソクーロフは、「レーニンの生を描きたかった」と語った。生身の人間レーニン

を描くことで、「レーニン信仰」に終止符を打ったということか。

権力者シリーズ

権力者シリーズで扱われている3名（ヒトラー、昭和天皇、レーニン）は、明らかに異質な組み合わせだ。確かにヒトラーは個人としての権力者であるが、レーニンはロシア革命を達成した段階で倒れてしまった人物だし、昭和天皇は結局のところ軍部に操られた人形でしかなかった。だから、レーニンや昭和天皇を強権主義的な個人としての権力者と規定するのは無理がある。

他方、昭和天皇の場合、侵略戦争遂行の法的な最高責任者であったことは逃れようのない事実であり、その責任の重大性と天皇個人としての弱さや孤独との非対称性が際立っている。その特異性が一つのテーマになる。スクーロフの狙いもそこにあるだろう。ただ、作品「太陽」がそ

れに成功しているとは思われない。天皇個人に焦点を当てているために、背景にある権力構造が見えず、天皇の役割の「非対称性」が描き尽くされていない。「何か違うな」という違和感があり、映画として成功しているとは思われない。戦前の国家体制の研究が不足している。

20世紀ロシアの最大の権力者は、まさにレーニンに代わってロシア社会主義を統治したスターリンだろう。

まさに西のヒトラーと比較対照さるべきは、東のレーニンではなく、スターリンであるはずだ。だが、スクーロフはスターリンを選ばずに、レーニンを対象にした。スクーロフが映画対象にしたレーニンの療養期間は数年に過ぎないが、スターリンのロシア統治は30年以上にわたっている。確かに悲劇性という意味では、レーニンの生が際立っているが、20世紀最大の権力者とも言えるスターリンの生を描いてもらいたかつ

た。スターリンの人としての特異性はロシアの特異性でもあり、現代のロシアに通じるものがはるはずだからである。国家主義が台頭している現在のロシアでは難しいのだろうか。スクーロフの映画に出てくる俳優は皆ロシア人であるが、レーニン役のレオニード・モズゴヴォイが、ヒトラー役を演じていた訳者だとは気づかなかった。

後書き

今、日本ではドキュメンタリ映画「靖国」の上映をめぐって混乱が続いている。終戦記念日の靖国神社の様子と神社のご神体を作る刀匠の映像を組み合わせた映画だ。靖国神社周辺の異様な風景を淡々と見せることが、それなりの意図にもとづいていることは間違いないが、そこからどのようなメッセージを受け取るかは、人それぞれの感性と知性が決めるものだ。政治家がしゃしゃり出る問題ではない。

第3回バルトーク 国際ピアノコンクール

金子三勇士君 見事、優勝！

去る3月25日～30日までセゲドで開催された第3回バルトーク国際ピアノコンクールにおいて、弱冠18歳の金子三勇士君が見事に優勝しました。

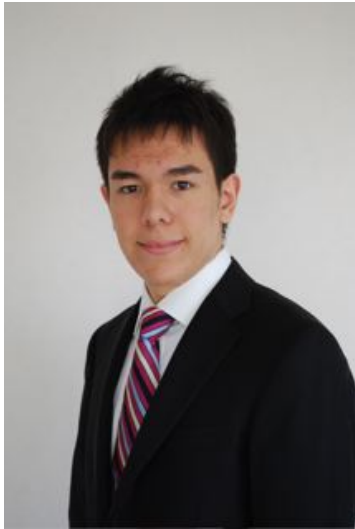
三勇士君の略歴

金子君は日本人の父とハンガリー人の母を持つ二世として日本に生まれましたが、小学校1年生の時に両親が住む群馬を離れ、ヴァーツの祖父母の許でピアノを勉強するためにハンガリーに来ました。それ以来、両親、兄妹と離ればなれになりながら、1人でハンガリーの生活を乗りきってきました。

ヴァーツの音楽学校に通いながら国内の年代別のピアノ、ソルフェージュ、民謡歌唱などのコンクールで毎年優勝し、ハンガリーのジュニアの世代では良く知られた男の子でした。

12歳になり、リスト音楽院の特別才能養成コースへの編入が認められ、ヴァーツの中学校に通いながら、リスト音楽院にも通うという毎日になりました。

2年前に日本へ戻り、日本でのコンクール参加を準備するために、東京音楽大学付属高校へ転校しました。今春、めでたく附属高校を首席で卒業し、音大へ進学することになりました。この



4月の入学式では、入学者の総代として、式辞を述べることになっています。現在、清水和音氏に師事しています。

歳に似合わない落ち着き

小さい時から独り立ちしてきたことから、厳しい環境でも物怖じしないのが、三勇士君の優れたところだと思います。弱音を吐くことなく、しっかりと課題をこなす精神力は、歳に似合わないほどです。国際舞台では、この精神力が大きな力になるでしょう。

昨年末のロン＝ティボーのコンクールでは、惜しくも2次予選で終わってしまいましたが、その落ち着いた演奏態度は高く評価されていました。

昨年はアテネとアリゾナのジュニア国際ピアノコンクールで優勝し、国際舞台へ一歩踏み出した三勇士君ですが、今後のシニアコンクール優勝でこれからの本格的な活躍が期待されます。

コンクール課題・選択曲

三勇士君が今次のコンクールで弾いた曲目は以下の通りです。コンクールではもちろん、現代曲を除き、すべて暗譜で演奏されます。

第一次予選曲（24名）

スカララッティ「ソナタト長調」

バルトーク「子供のために」

バルトーク「ルーマニア民族舞曲」

リスト「ハンガリー狂詩曲第12番」

第二次予選曲（12名）

ショパン「ハ短調エチュード」

スクリャービン「変ニ短調エチュード」

ドビュッシー「子供の領分」

バルトーク「ルーマニア舞曲」

バルトーク「小さな蠅のお伽斬」

ミクロコスモス第4巻より *ostinato*

決勝ラウンド曲（6名）

リスト「ピアノ協奏曲第2番」

コンクールの概要

バルトーク記念のピアノコンクールを復活させようと、セグド音楽院とバルトークの故郷ナジセントミクローシュとの共同事業として、2004年に復活されたものです。今年は24名が参加しました。最年少は17歳、最年長は27歳でした。

金子三勇士君は決勝に残った6名の最年少で、他のファイナリストは皆、リスト音楽院のピアノ科教授の弟子たちです。先輩たちを押しつけての優勝となりました。

副賞として、ブロードマンのピアノを獲得しましたが、河合のグランドピアノに交換できるようです。ただし、三勇士君には不要なので、どなたか日本で引き取ってくれる方を探しています。もう一つの副賞は、来シーズンにセグド・オーケストラ、ハンガリー・ラジオ・オーケストラと共演できることです。早く三勇士君の演奏を聴きたいものです。

（盛田記）

Kaneko nyertes szegedi futamai

Többmilliós hangszert kapott fődjéért a japán zongorista

Papp Ferenc

Az egyik legsikeresebb szegedi gondolat volt *Kerek Ferencé*, a városi egyetem zeneművészeti karának dékánjéé, amikor 2004-ben útjára indította a Bartók Béla Zongoraversenyt. A zeneszerző március 25-i születésnapjához kapcsolódó eseményt két évente rendezik, s az immár harmadik nemzetközi találkozóra Japánból, Kínából, Spanyolországból és Szerbiából is érkeztek versenyzők a Tisza-parti város Fricsay Ferenc Hangversenytermébe. A huszonnégy tehetségnek nem mindennapi zsűri előtt kellett számot adnia tudásáról, hiszen *Bogányi Gergely* Kossuth-díjas zongoraművész elnökölt, s a bírálók között találhattuk *Csik Boldizsár* Erkel-díjas zeneszerzőt Marosvásárhelyről, a Temesvári Vest Egyetem dékánját, *Felicia Stankovitch*-t, valamint *Kerek Ferenc* Liszt-díjas zongoraművészt is. A megnyitón *Bogányi* rögtön mintát is

adott a hallgatóságnak, hogyan zongorázzik ő *Chopint*. A versenyzőknek ekkor még *Scarlattit*, *Liszt*- és *Bartók*-műveket kellett előadniuk, ám az elődöntő-sorozat után felére fogyatkozott csapat repertoárja már *Chopin* és *Debussy* darabjaival bővült.

A zsűri tagja volt *Némethy Attila* zongoraművész – a Liszt Ferenc Zeneművészeti Egyetem tanárának három növendéke jutott a döntőbe. A harmas szám a műsorban is visszatért: ennyiszer hallhattuk egymás után *Liszt Haláltáncát*, a hat döntős fele ugyanis ezt a darabot játszotta, köztük a vehemens erejű *Dráfi Kálmán* növendék, *Vadászi István*. A győztes mégsem közülük került ki: *Liszt A-dúr zongoraversenyével* a japán *Kaneko Mijudzszi* nyerte meg a fődját, a több millió forintot érő Brodmann zongorát. Ugyancsak ő kapta a kíséretet biztosító zenekar, a Szegedi Szimfonikusok díját. Ez egyúttal egy hazai meghívást is jelent, a japán pia-

nistát tehát hallhatjuk még itthon. A 18 éves Kaneko magyar édesanyja gyermeke, így tökéletes magyarsággal mondta el, hogy háromévesen kezdett zongorázni, s hatesztendőskor óta él hazánkban. A fiú korán a Zeneakadémia különleges tehetségeket gondozó osztályába került, ám mára visszatért Japánba, egy arizonai zongoraverseny győzteseként ugyanis a tokiói zeneművészeti egyetem növendéke. A fiatal művész a romantikus és a kortárs szerzőket kedveli leginkább.

A második díjat, s a vele járó 300 ezer forintot a budapesti *Fejes Krisztina* kapta, harmadikként pedig megszotva végzett *Tihanyi Zsuzsanna* és *Hegyes Ádám*.

A vasárnapi díjátadó ünnepség után a verseny résztvevői *Bartók Béla* szülővárosába, Nagyszentmiklóásra utaztak, ahol megkoszorúzták a zeneszerző emlékművét, este pedig a település Nákó-kastélyában adtak gálakoncertet.